

献血推進のための効果的な広報戦略等の 開発に関する研究 — 3年目 —

独立行政法人国立病院機構大阪医療センター
臨床研究センター エイズ先端医療研究部
白阪琢磨

<経緯>

臓器移植など治療における輸血液の需要の増加

献血者での年間HIV陽性数および陽性率の上昇

(平成20年度、10万人あたり2.11件 血液事業部会)

安全な血液を如何に多く確保するかが重要な課題

供血者、特に若年者層の献血離れの傾向が指摘

<目的>

今後の安全な血液の確保のために、献血の実状を明らかにし、

献血離れの現象があるとすれば、その原因の解明を行い、

献血推進に向けた効果的広報を開発する。

<研究分担者>

秋田 定伯(長崎大学医学部) 輸血液の需要に関する研究

石川 隆英(日本赤十字社) 供血者の実情調査と献血促進および阻害因子に関する研究

菅原 拓男(日本赤十字社) 献血推進に向けた職員の研修方法に関する研究

田辺 善仁(FM大阪) 若者における献血意識と献血行動の促進および阻害因子に関する研究

田中 純子(広島大学医学部) 献血推進施策の効果に関する研究

<研究協力者>

はばたき福祉事業団 大平勝美、柿沼章子

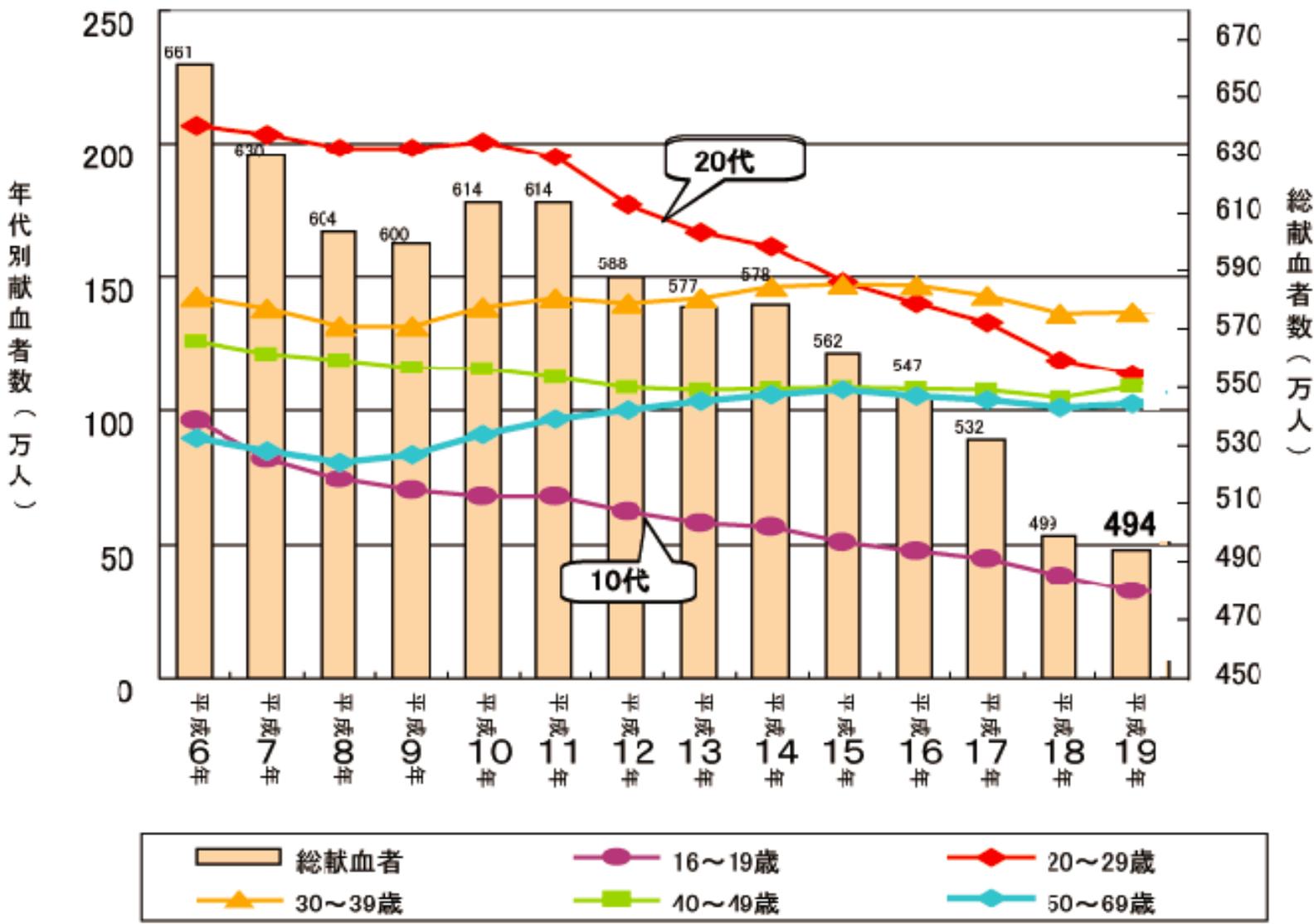
長崎大学医学部付属病院 江藤栄子、長池恵美、松田三喜子

日本赤十字社 照井健良、土田幸司

FM大阪 小野田敦乙

広島大学 秋田智之

献血者の推移



わが国における将来推計人口に基づく 輸血用血液製剤の供給本数と 献血者数のシミュレーション

必要献血者延べ人数の シミュレーション(I)

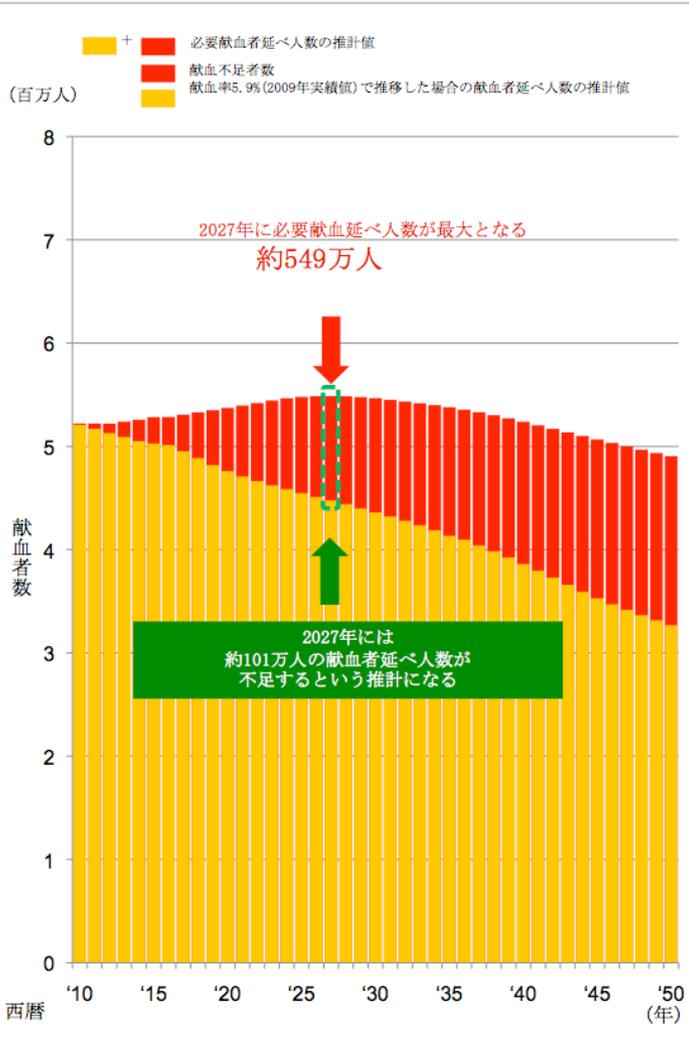
2009年の年代別献血率を今後も維持すると仮定した場合において、
不足する献血者延べ人数を若年層（10代-20代）のみで確保する
場合における必要な若年層献血率のシミュレーション

2010年9月30日

出生率_{中位}(死亡率_{中位})の場合



グラフ5
過去10年間における年代別献血率の推移



東京都福祉保健局がまとめた2007年輸血状況調査結果と、将来推計人口を用いて将来の輸血用血液製剤の供給予測数を算出し、供給に必要な献血者数を算出すると、2027年には約549万人必要となるシミュレーションになる。
また、2009年の献血率（＝献血者延べ人数／献血可能人口）5.9%を今後も維持すると仮定し、将来推計人口より、仮想の献血者延べ人数を算出すると、2027年には、約101万人不足するというシミュレーションになる。



東京都福祉保健局がまとめた輸血状況調査結果と、将来推計人口を用いて将来の輸血用血液製剤の供給予測数を算出し、供給に必要な献血者延べ人数を算出すると、2027年には約549万人必要となるシミュレーションになる。（グラフ4参照）
また、2009年の年代別献血率（＝年代別献血者延べ人数／年代別人口）を今後も維持すると仮定し、将来推計人口より、仮想の献血者延べ人数を算出すると、2027年には、約440万人になると推計され、約109万人の献血者延べ人数が不足するというシミュレーションになる。（グラフ6参照）
この不足した献血者延べ人数を、16歳から19歳と20代の将来推計人口の比率で按分し不足する献血者数を上乗せすると、2027年には、16歳から19歳の献血率を13.0%、20代の献血率を14.9%まで引き上げる必要があるというシミュレーションになる。

このグラフにおける献血率は、各年代の献血者延べ人数から献血可能人口を除いた数値である。

献血推進に向けた効果的な広報戦略等の 開発に関する研究

安全な血液を
如何に多く
確保するか

若年者層の
献血離れの
傾向から戻す
には？

広報戦略等の
評価

- 日本赤十字社 血液事業本部
- FMオオサカ
- 長崎大学病院
- はばたき福祉事業団

班 会 議

平成21年度

第1回 2009.5.18(月) 東京

第2回 2009.6.22(月) 東京

第3回 2009.7.27(月) 東京

第4回 2009.9.14(月) 東京

第5回 2010.1.25(月) 東京

平成22年度

第1回 2010.4.23(金) 東京

第2回 2010.6.21(月) 東京

第3回 2009.9.27(月) 東京

第4回 2010.1.24(月) 東京

平成23年度

第1回 2011.7. 4(月) 東京

第2回 2011.8.22(月) 東京

第3回 2012.1.28(土) 長崎
(予定)

若者の献血者を増やすためには？

献血を知らない、身近でない、

献血に関する情報発信

献血の意義を知らせる

伝わりやすいメッセージは？

当院における献血推進へ向けての実態意識調査

長崎大学病院

形成外科

看護副部長

形成外科・内科病棟師長

血液内科 病棟師長

秋田定伯

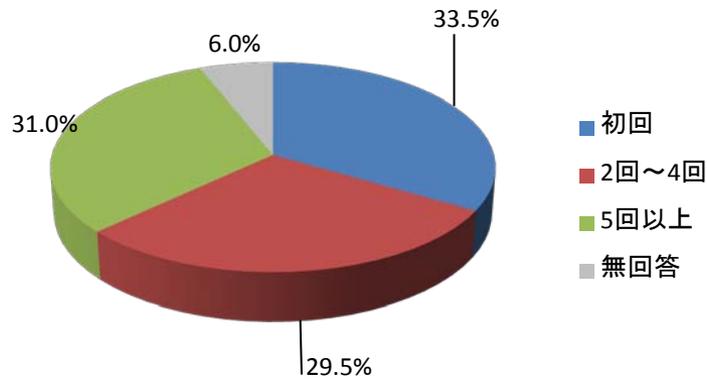
江藤栄子

松田三喜子

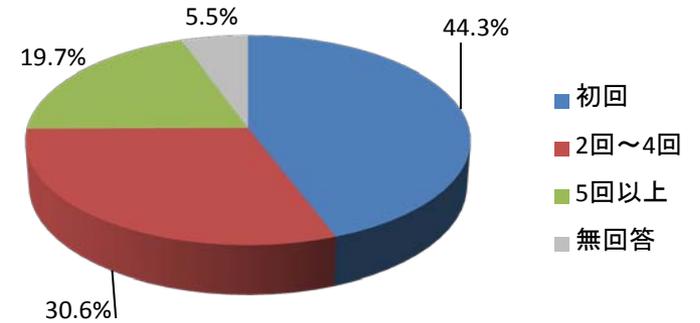
長池恵美

	2009年度	2010年度
調査期間	7/15～3/31	4/1～3/31
配布数	204	189
未回収	4	6
回収率	98.0%	96.8%
回答拒否	0	1

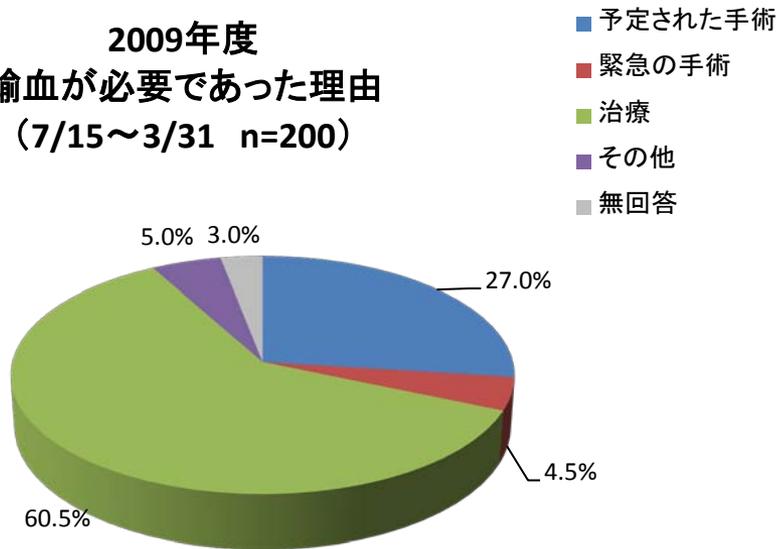
2009年度_輸血回数
(7/15~3/31 n=200)



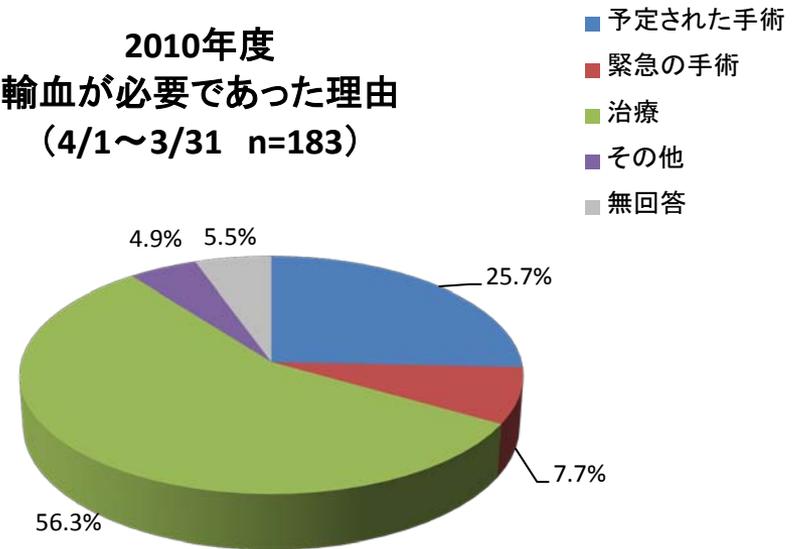
2010年度_輸血回数
(4/1~3/31 n=183)



2009年度
輸血が必要であった理由
(7/15~3/31 n=200)

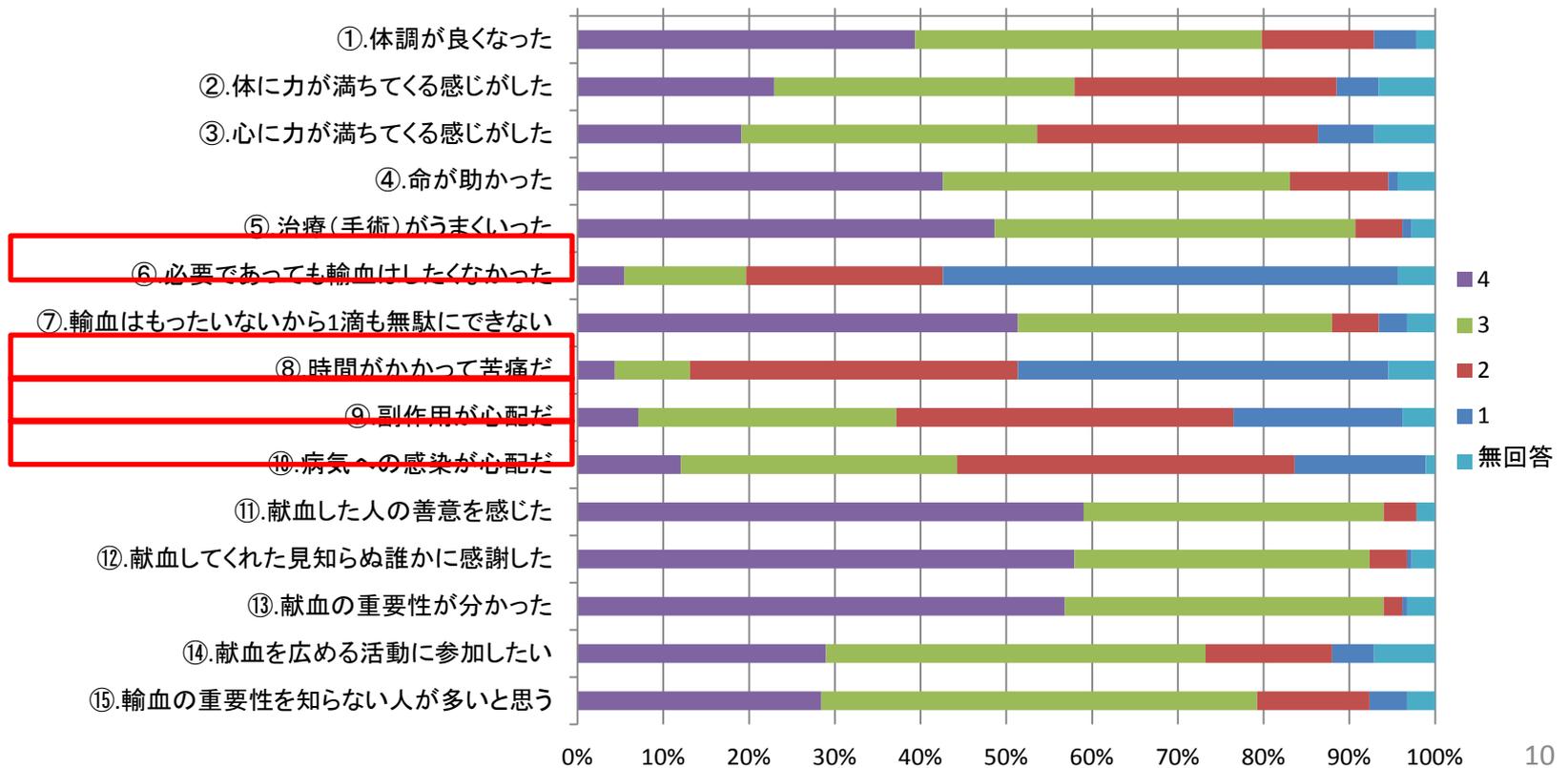


2010年度
輸血が必要であった理由
(4/1~3/31 n=183)



‘10年全体（4/1～3/31）

I	II														
選択	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
1	9	9	12	2	2	97	6	79	36	28	0	1	1	9	8
2	24	56	60	21	10	42	10	70	72	72	7	8	4	27	24
3	74	64	63	74	77	26	67	16	55	59	64	63	68	81	93
4	72	42	35	78	89	10	94	8	13	22	108	106	104	53	52
無回答	4	12	13	8	5	8	6	10	7	2	4	5	6	13	6
合計	183	183	183	183	183	183	183	183	183	183	183	183	183	183	183
点数集計	567	481	461	578	609	299	603	299	397	437	638	630	629	518	543
平均値	3.1	2.6	2.5	3.2	3.3	1.6	3.3	1.6	2.2	2.4	3.5	3.4	3.4	2.8	3.0



献血に関する意見・感想/カテゴリー別分類(2009～2010年度)

* 2年間で111名の対象者より179のご意見・感想を頂きました *

		2009	2010	合計	
提言 計 64	場所	9	7	16	
	メリット	3	4	7	
	痛み	3	2	5	
	時間	待ち時間	1	0	1
		献血所要時間	4	0	4
	広報	11	12	23	
その他	託児所の希望等	5	3	8	
感謝		9	14	23	
大切さの認識		8	7	15	
献血して欲しい		9	12	21	
献血したい		12	9	21	
知識不足		2	2	4	
その他(感想)		16	15	31	
合計		92	87	179	

けんけつ
H O P
S T E P
J U M P



厚生労働省

厚生労働省では、例年、献血に関する適正な知識の普及に資するため、高校生用テキストを作成しております。

この度、平成22年版「けんけつ HOP STEP JUMP」の高校生用を掲載いたします。

なお、このテキストは、平成22年2月末より全国の高等学校、教育委員会等に対し直接送付しております。

点滴台下げられている
輸血の袋に両手を合わせて
お礼を言いました。

たくさんの人たちが献血をしてくださった
おかげで、私は今日も生き延びられる。
少しでも元気になる。たくさんの人たちのパワーを
もらって希望が持てるようになりました。
本当に本当に、みなさまありがとうございました。

献血と言えば、
手術とか事故しか思い浮かばなかったが、
自分が血液の病気になり、
本当に献血の必要性を強く感じた。
同時にとても感謝しています。



まさか自分が輸血を受けなければ
いけない病気にかかるとは、
夢にも思っていませんでした。

いつも心の中で(どこのどなたなのかわからない
けれど)感謝しています。

数日前、病室のテレビで、献血をする人の数が減り、
高校生や大学生が街頭でキャンペーンを行っている
様子を見ました。それと献血ルームで献血を行っている
人の映像も目にするのができ、感謝しました。

これからもぜひ、運動を続けていて
ほしいものと思います。



現在入院して治療中です。
血液の病気で小児です。
長期にわたり大変多くの輸血を受けました。
一回一回ごとに
多くの方々の献血・善意に本当に
感謝しています。



厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業
「献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究」より引用

輸血を受けた方々の声

このページでは、病気やケガのために輸血を受けた患者さんや、そのご家族の方の声を紹介します。



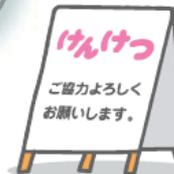
私は現在、骨髄腫で
血液ができません。
今になって献血・輸血の
ありがたさが分かります。

発病以来15年経ちますが、
輸血を受けた事で現在に至るまで
命をつないで居ります。
心から感謝の毎日を送っています。
若い方の献血が私たちを助けていますので
どうかこれからも1人でも多くの方の
献血をお願いいたします。

誰かも分からない方の
ありがたい献血のおかげで、
娘の容体が少しでも良くなっているので、
機会があれば他の子ども達や家族に
献血の必要性などを話して、
血液が必要な方への提供を
呼びかけるようにしていきたい。



私の受けている治療には、
輸血が不可欠なもので、
今こうして私が元気に生きていられるのは、
輸血があったからこそだと思っています。
私は血液関係の病気であるため、
将来献血という形で恩返しはできないだろうけど、
何か別の方法を見つけ出し、
病気と闘う人のために役に立ちたいと
思っています。



23

キミに出会えてよかった ～長崎大学病院編～

2009年11月19日

アーティスト「メティス」がLOVE in Actionに賛同。
輸血を受けた患者さんを訪問し、その思いを込め、はたちの献血
キャンペーンCMソングを製作！

長崎大学病院を訪問



供血者の実情調査と献血促進及び 阻害因子に関する研究

若年層献血者確保に係る広報展開「LOVE in Actionプロジェクト」
の実施について

平成23年8月22日



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

目的

少子高齢化と400mL献血の普及啓発に伴い、若年層献血が減少する中、若年層に献血の意義を伝え、献血行動を促すことを目的に展開する。

LOVE in Actionプロジェクトとは

- ・ 「献血は愛です」というメッセージを届ける活動
- ・ 平成21度から始まる日本赤十字社の様々な献血推進活動(Action)

平成21年9月28日 記者発表会！



**平成21年10月1日 プロジェクト始動！
(平成22年6月30日まで)**



LOVE in Actionプロジェクトとは

- Action1 ログマーク大作戦
- Action2 ラジオ大作戦
- Action3 ご当地大作戦
- Action4 コラボ大作戦
- Action5 リンク大作戦



武道館



Kスタ宮城

Action FINAL 「LOVE in Action Meeting(LIVE)」

平成23年6月14日、15日

献血推進がメジャーに!?
献血は愛です!



愛・命・愛 “命の象徴、血液”

やさしい社会



はばたき福祉事業団 大平勝美

献血を受ける人

献血する人

献血を推進

献血啓発

献血由来血液製剤を患者に実施する人

医療機関の意識

薬剤部

経営者

医師の意識

献血推進 血液への親しみ 幼児（絵本）→血液探検隊→こどもを通して命の啓発
“はばたきとともに”12年 “けんけつちゃん”

患者
家族
友人

献血
日赤献血実施体
系
献血者

医療機関
医師
医療スタッフ
病院経営



⇒より人を中心に 「血液事業」の変革

平成22年度第2回薬事・食品衛生審議会
薬事分科会血液事業部会献血推進調査会資料
(平成22年11月9日開催)

資料4-5

絵本による広報

(絵本「ぼくの血みんなの血ーあたたかい贈りもの」配布状況)

先般、社会福祉法人はばたき福祉事業団様より同事業団が監修・製作した、血液と献血について学ぶことができる絵本を2,200冊の寄贈を受けたところです。

日本赤十字社においては、各血液センターに配布し、献血ルームへ設置、小学校及び医療機関の小児科等へ配布し、献血の必要性等に触れていただくこととしています。

なお、各配布先については下表のとおりとなっております。

配布先	件数	配布数
小学校	171	357
その他教育機関 (※1)	38	65
公共機関 (※2)	267	691
血液センター	63	344
献血ルーム	84	524
日赤関連施設	32	109
その他	6	30
合計	661	2,120

※1 幼稚園及び保育園等

※2 医療機関、図書館及び行政機関等

絵本「ぼくの血 みんなの血」

(2005.01.08)

血液の大切さや、いのちの大切さについて考えてみませんか
親子で「血」と「献血」について楽しみながら学ぶことのできる絵本のご紹介です。



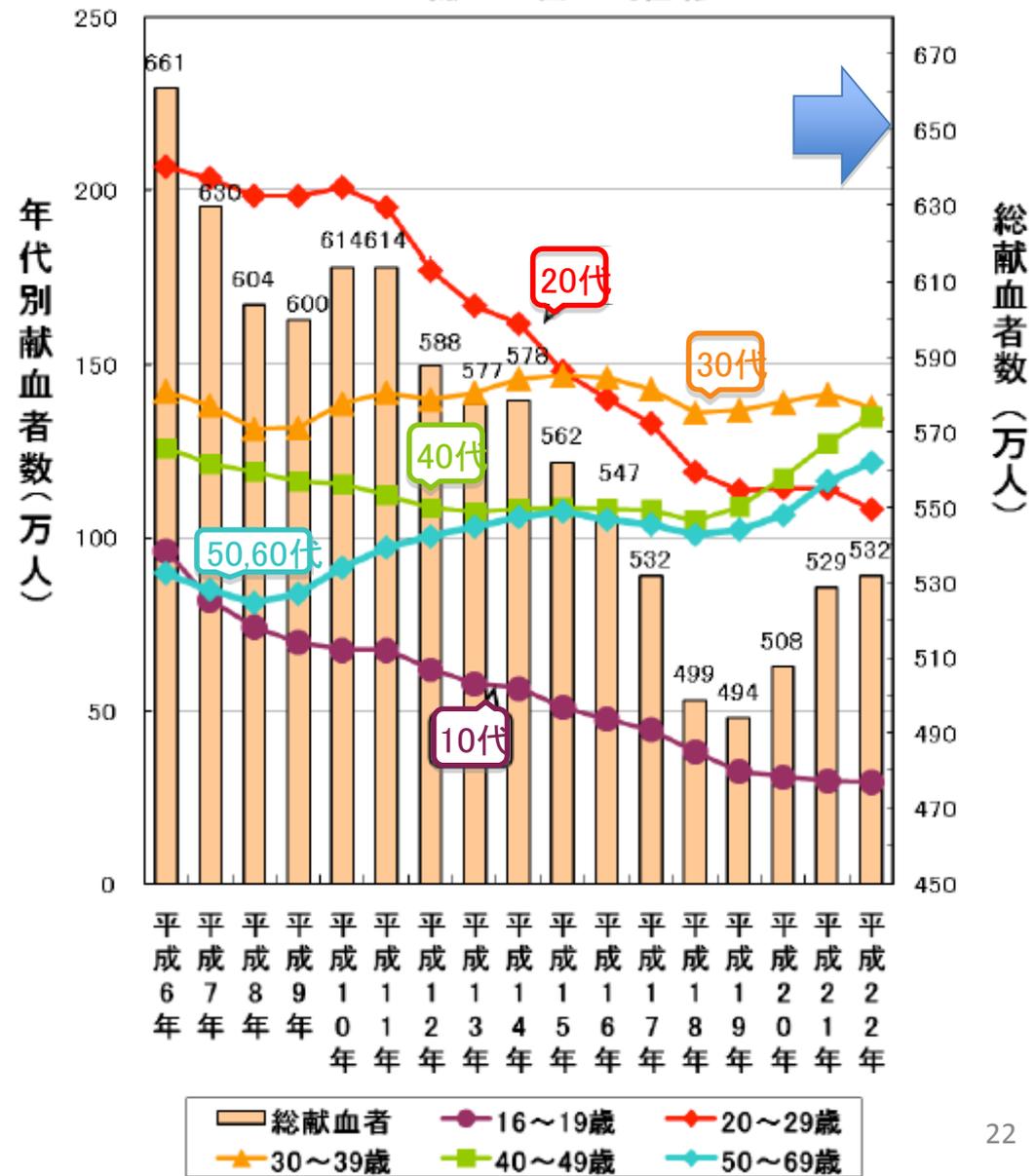
ぼくの血 みんなの血
ー あたたかい贈りもの ー

石井聖岳 絵
田中尚人 かき始まあきこ 文
厚生労働省 推薦
日本赤十字社 協力
ももくり社の木社 発行

献血量の変化は？

平成20年度
VS
平成21年度
VS
平成22年度
VS
平成23年度？

献血者の推移



献血推進に向けた広報の評価

献血データの解析

研究分担者 広島大学大学院 医歯薬学総合研究科 疫学・疾病制御学
田中純子

研究協力者 広島大学大学院 医歯薬学総合研究科 疫学・疾病制御学
岡本健吾
秋田智之
小田奈央

FM OSAKA
小野田敦乙

日本赤十字社
照井健良

3年間の主な研究計画

平成21年度

- ・「献血に関する意識調査2009」

若年層において献血の促進因子や阻害因子は何か、また、どのような媒体を利用して普及啓発を勧めていくことが効果的であるか

平成22年度

- ・「献血データの解析2010」

近年、若年層での献血本数が減少しているが、一方、少子高齢化のために若年層の人口が減少している。

人口、地域を考慮した献血本数の解析を行う必要がある

平成23年度

- ・「献血に関する意識調査2011」
- ・「献血データの解析2011」

平成21年度

・「献血に関する意識調査2009」

【対象】

・献血ルーム(計10カ所)の献血者(大阪府内)
2009年9月から10月 平日1日および休日1日

・2大学学園祭における若年層(大阪府内)
2009年11月 学園祭1日

「献血に関する意識調査」無記名自記式配布調査
初回献血者、献血未経験者：19問22項目
複数回献血者、献血経験者：25問29項目



【解析対象】

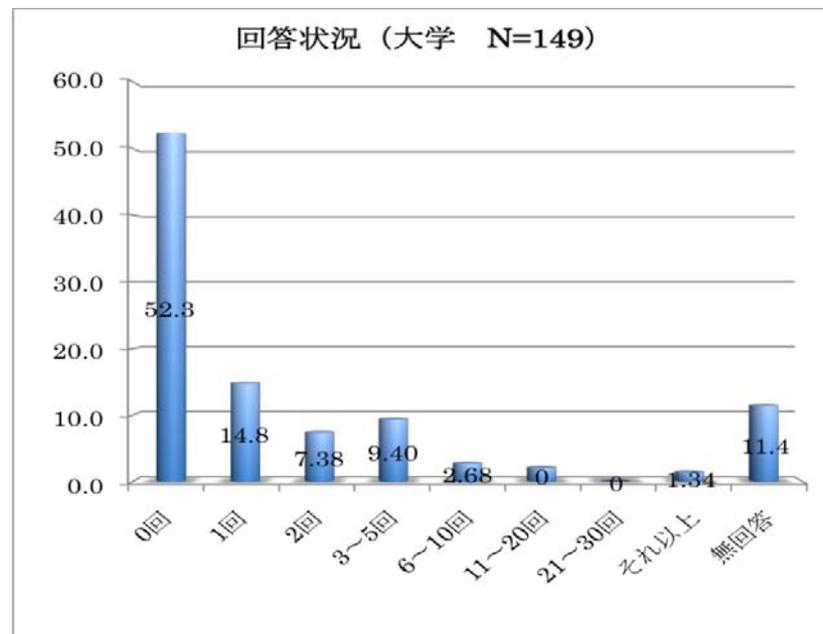
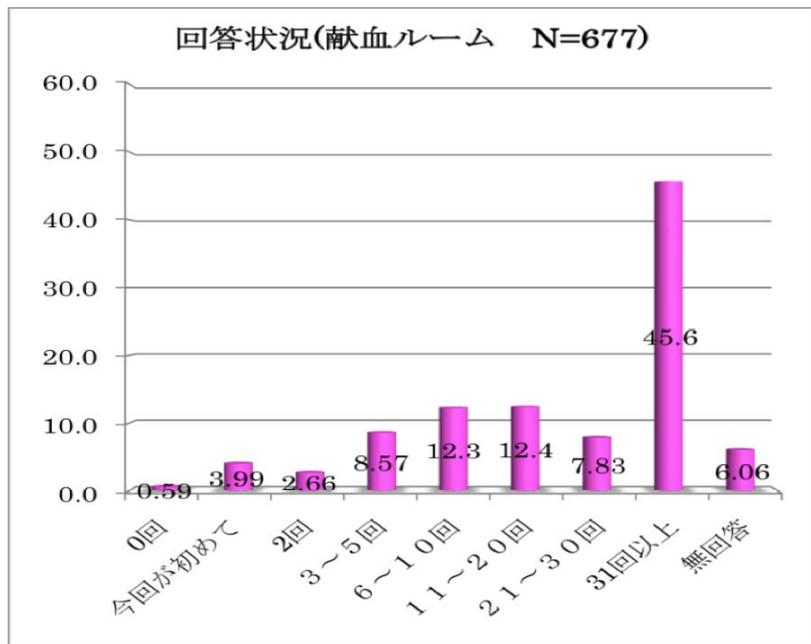
・献血ルーム回収数750名のうち、年齢と性別が判明した677名を有効回答
(有効回答率90.3%)とした。

・大学学園祭回収数181名、同有効回答数 149名(82.3%)。献血経験者は73
名、献血未経験者は76名。

平成21年度

・「献血に関する意識調査2009」

【結果】



献血に関するの要望:

献血の推進に前向きな項目

献血ルームの受付時間の延長、
献血者の登録サービス、
献血手帳の改善など

未経験者:

献血に関する知識&イメージの不足

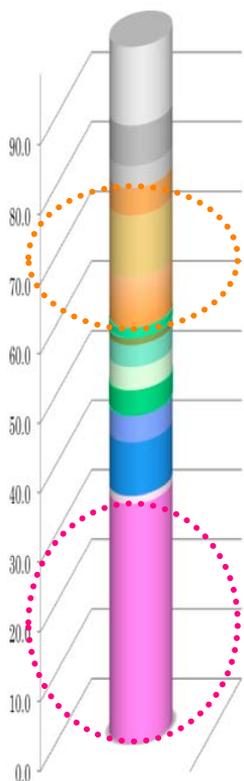
血液製剤として使われることを知らない
イメージが暗い、何をしているのかわからない

平成21年度

・「献血に関する意識調査2009」

【結果】

初めて献血をしようと思った理由



ピンク色: 「奉仕の心に基づく内容」

自分の血液が役に立って欲しい、輸血は愛に根ざしたものだから

青色: 「友愛の精神に基づく内容」

輸血用の血液が不足していると聞いた、過去に自分や家族などが輸血を受けたことがある

緑色: 「自身に対するメリットを重視する内容」

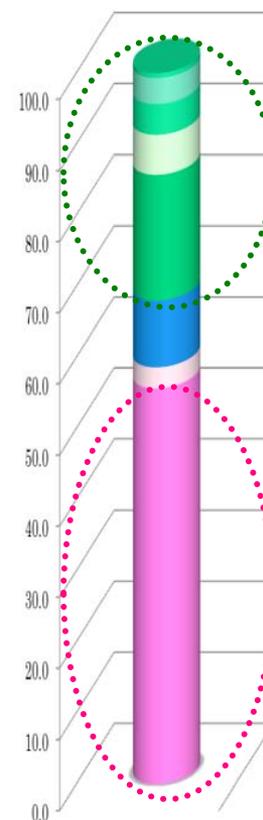
検査結果が自分の健康管理になる、将来家族などが輸血を受けるかもしれないから、お菓子やジュースがもらえる、ネイルアートやマッサージが受けられる、図書券がもらえる、テレビやDVDが観られる

オレンジ色: 「きっかけに関する内容」

家族や友人に勧められたから、高校や大学に献血バスや出張献血が来たから

グレー: 「その他の内容」

現在献血をしようと思う理由



平成21年度

・「献血に関する意識調査2009」

【まとめ】

- 献血に関する知識、イメージの不足
- 初めて献血の理由は、「友愛の精神」と「きっかけ」
- 献血を継続する理由は、「友愛の精神」と「メリット」

- 献血に関する情報や意義、献血に関する正しい知識を的確に提示することが必要
- 献血推進のための広報戦略は、献血経験の有無や年代によって効果的な媒体が異なるため、その集団特性に応じた戦略が必要

- テレビやイメージキャラクターを使ったポスターで、全国的にアピールした「はたちの献血キャンペーン」の認知度は、年代・性別を通じて、圧倒的に高かった

- 限られた世代をターゲットとするよりも、幅広い世代にアピールする力が強い方法、例えば、テレビやラジオ、街頭での呼びかけ、ポスターなどを使った活動が効果的と考えられた

平成22年度「献血データの解析2010」

【対象】

- ・2008(平成20)年度の全献血者(N=5,137,612)
- ・2009(平成21)年度の全献血者(N=5,303,431)

【解析項目】

- ・性別
- ・生年月日
- ・種類 /全血献血・成分献血
- ・初回・再来
- ・献血ルーム /採血都道府県
- ・採血年月日 採血月・採血時年齢(16～69歳)

【結果】

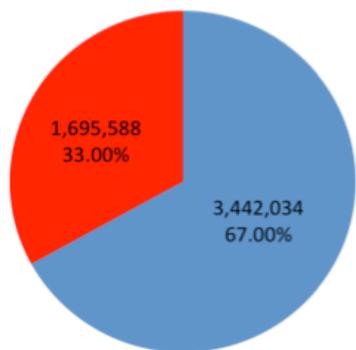
【第一部 献血本数の解析】

【第二部 人口1000人あたり献血本数の解析】

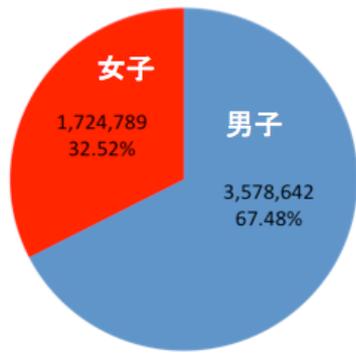
平成22年度「献血データの解析2010」

第一部 献血本数の解析

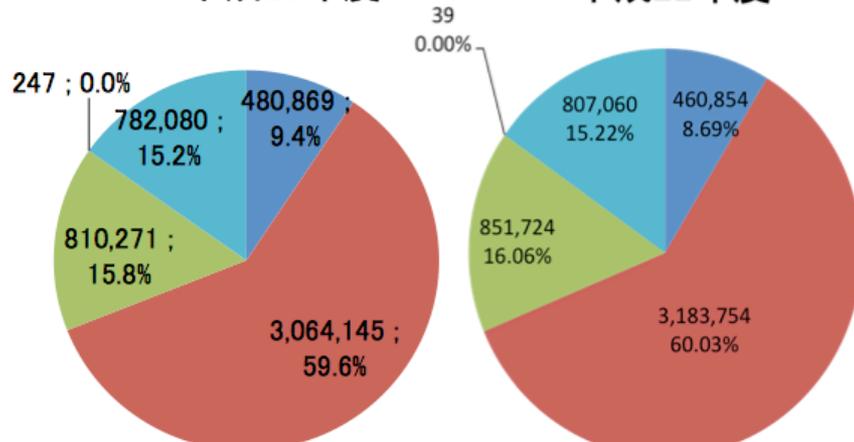
平成20年度



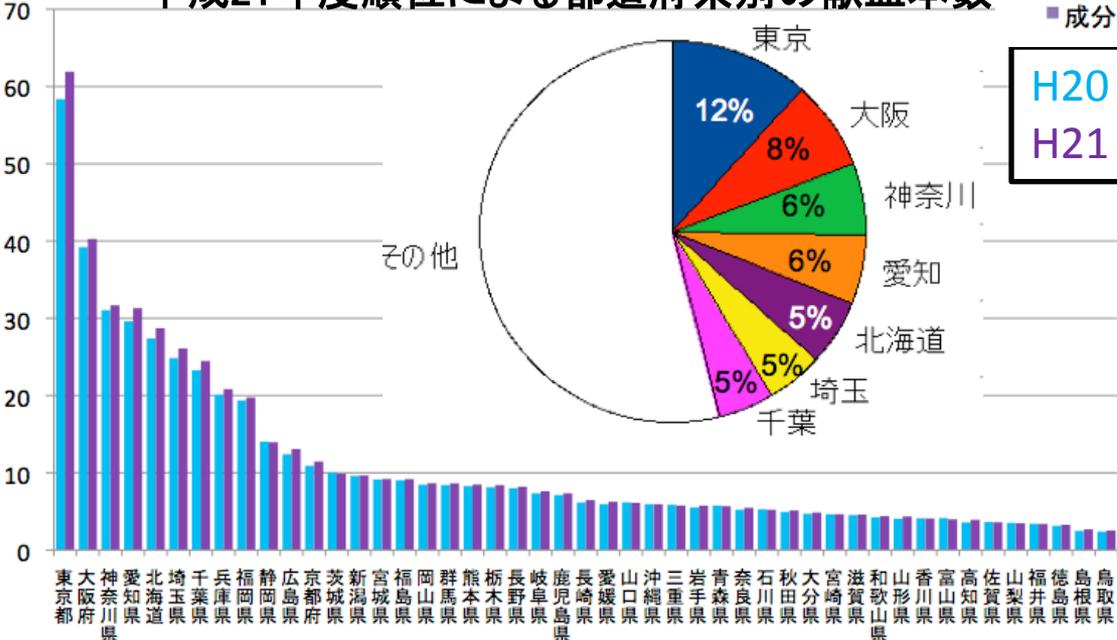
平成21年度



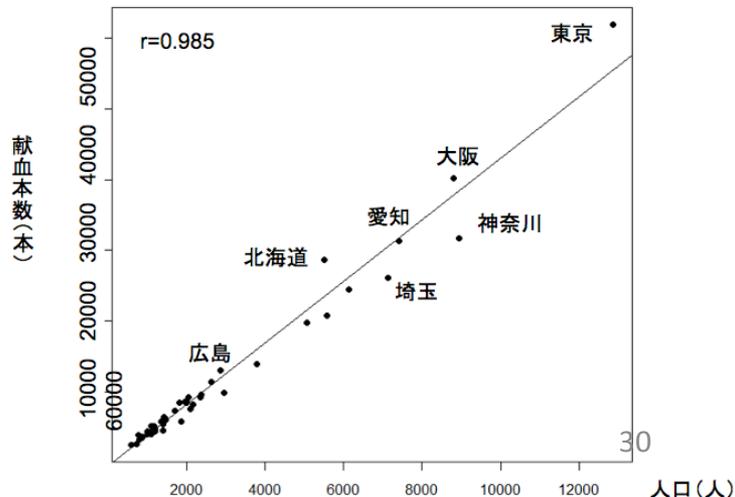
平成20年度



(万本) 平成21年度順位による都道府県別の献血本数



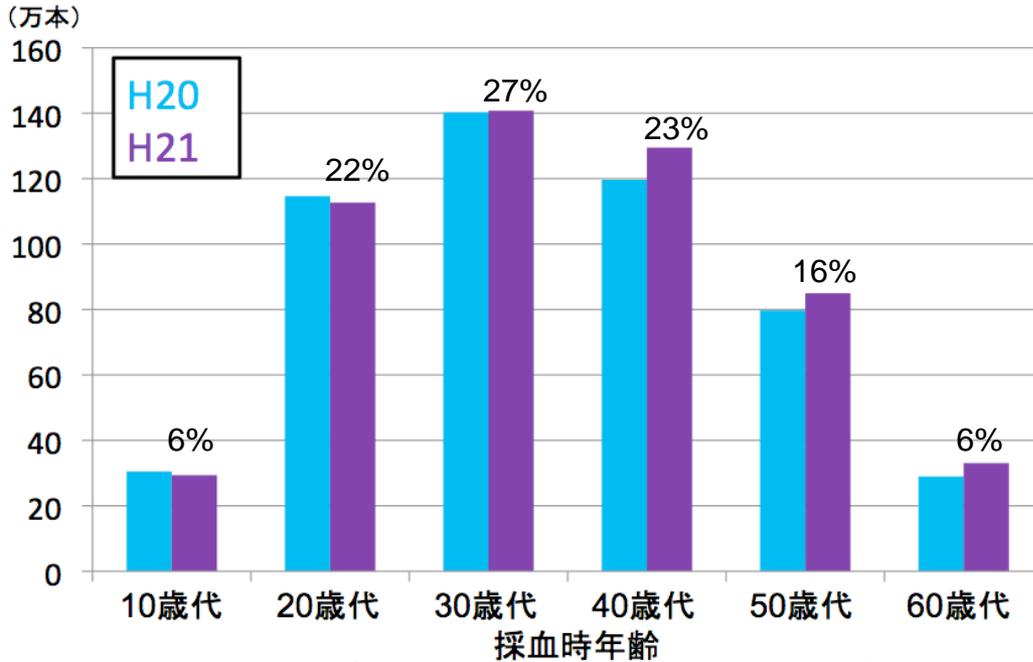
各都道府県の人口と献血本数



平成22年度「献血データの解析2010」

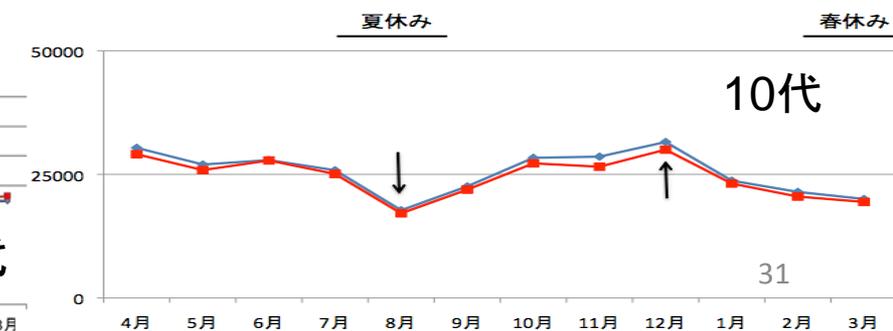
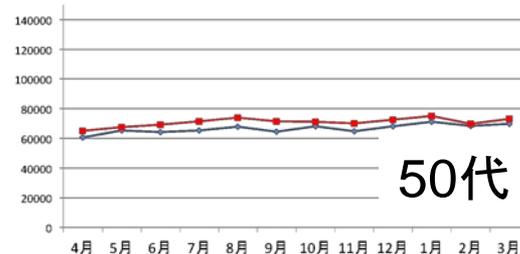
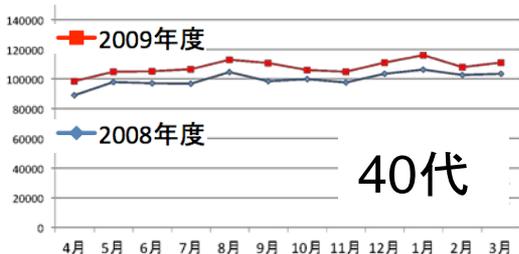
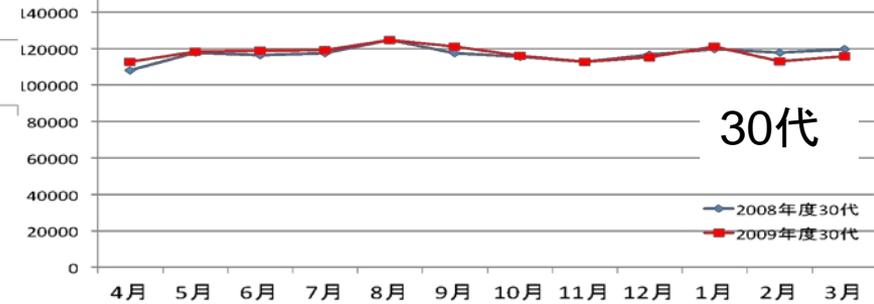
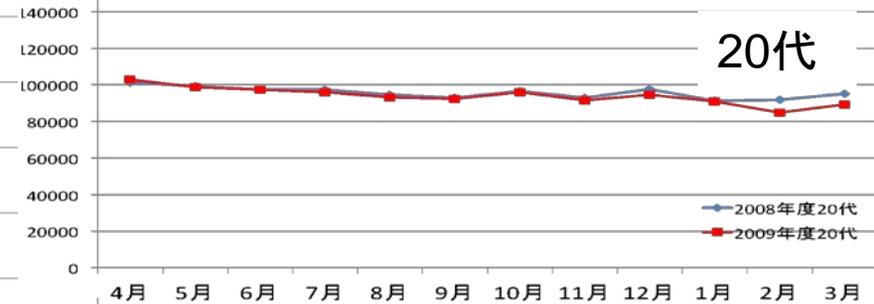
第一部 献血本数の解析

年齢階級(10歳区分)別の献血本数



20代、30代、40代がそれぞれ21-27%であり、全体の4分の3を占める。

年代毎の月別献血本数の変動

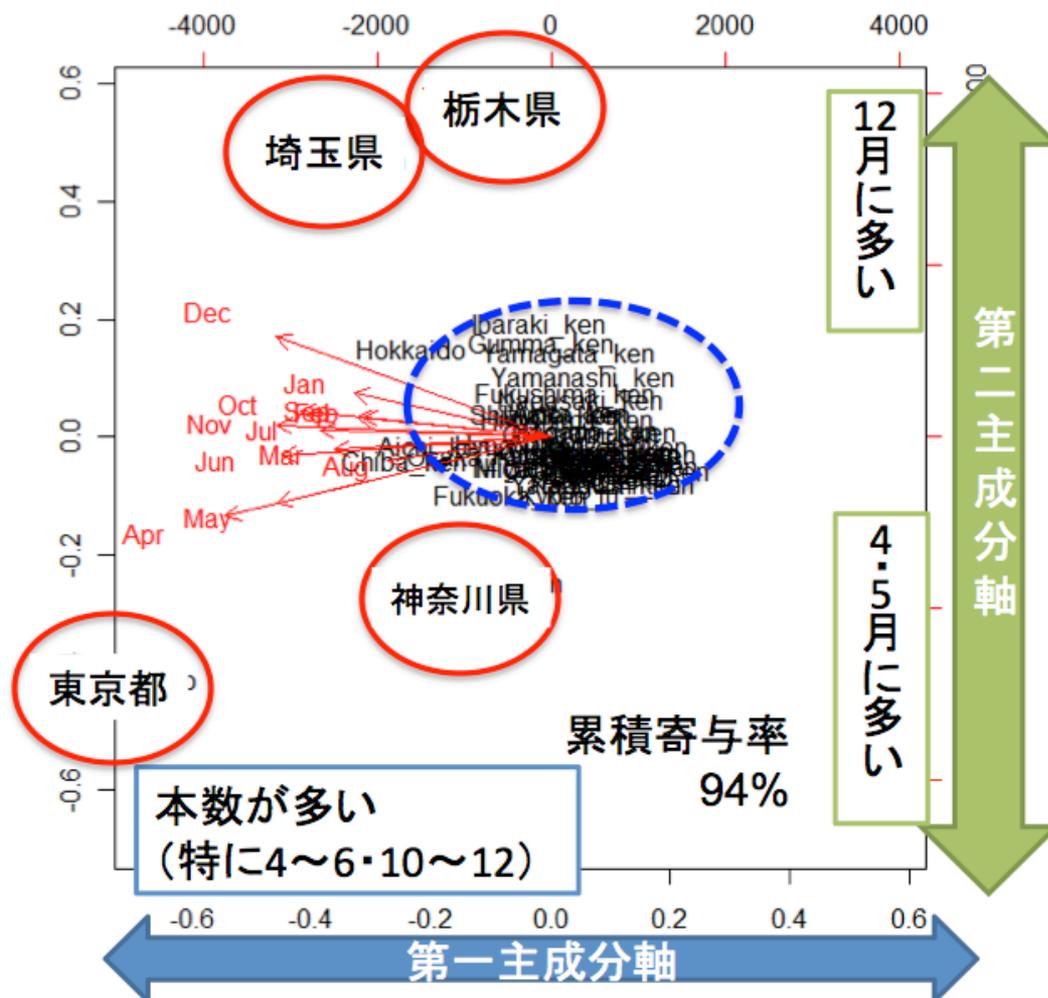


平成22年度「献血データの解析2010」

第一部 献血本数の解析

10歳代の月別献血本数を用いた主成分分析による変動パターン解析

	第1主成分	第2主成分
4月	-0.3879455	-0.49663546
5月	-0.3270082	-0.41136424
6月	-0.3203802	-0.11561979
7月	-0.2747954	0.04330078
8月	-0.1957287	-0.15375554
9月	-0.2309655	0.12150461
10月	-0.2981909	0.16958285
11月	-0.3257241	0.07572807
12月	-0.3271866	0.62978663
1月	-0.2341164	0.27539381
2月	-0.2234710	0.13068379
3月	-0.2567846	-0.08025811



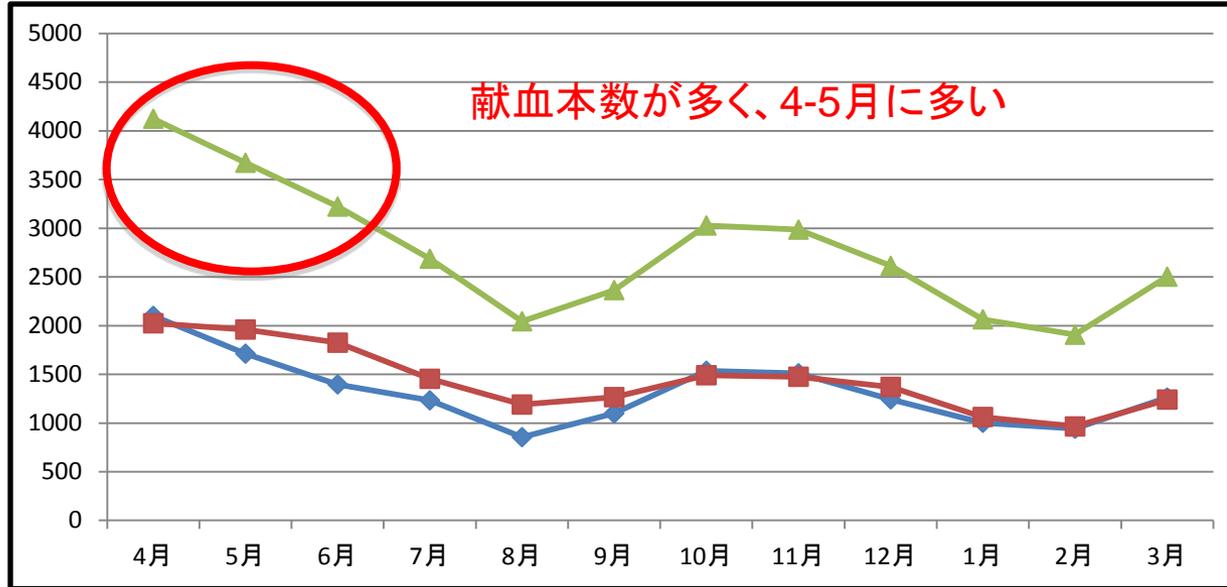
10歳代の変動パターンとしては、主に4・5月に特に多い都道府県と、12月に多い都道府県に分かれた。月別献血本数の変動には、年代別に大きな相違が認められない

平成22年度「献血データの解析2010」

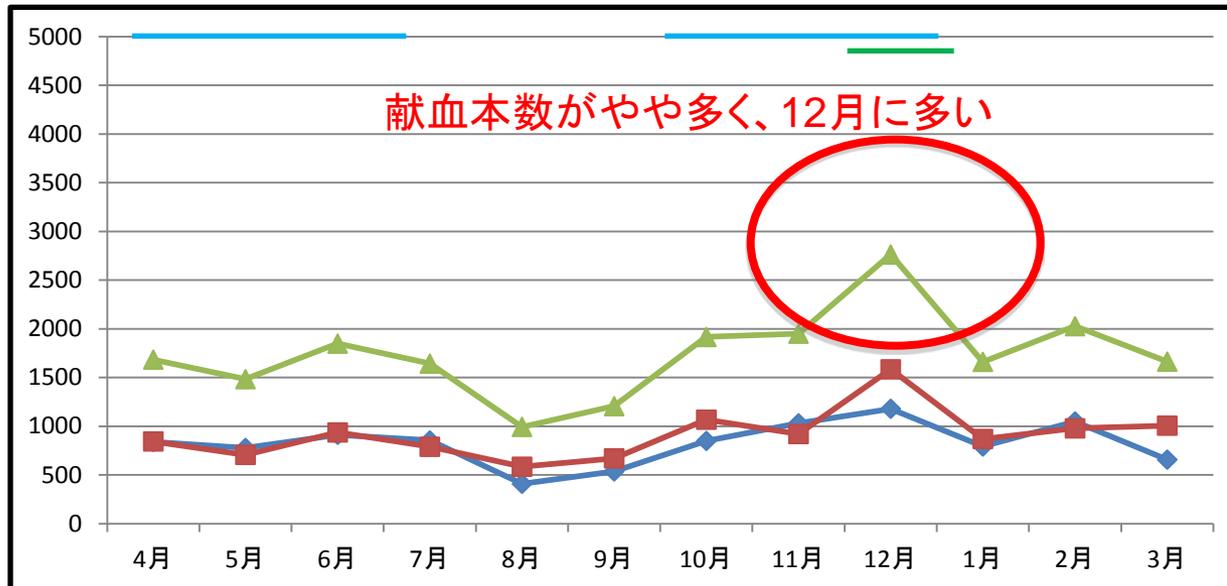
第一部 献血本数の解析

全血献血
献血本数
H21

東京, 10歳代



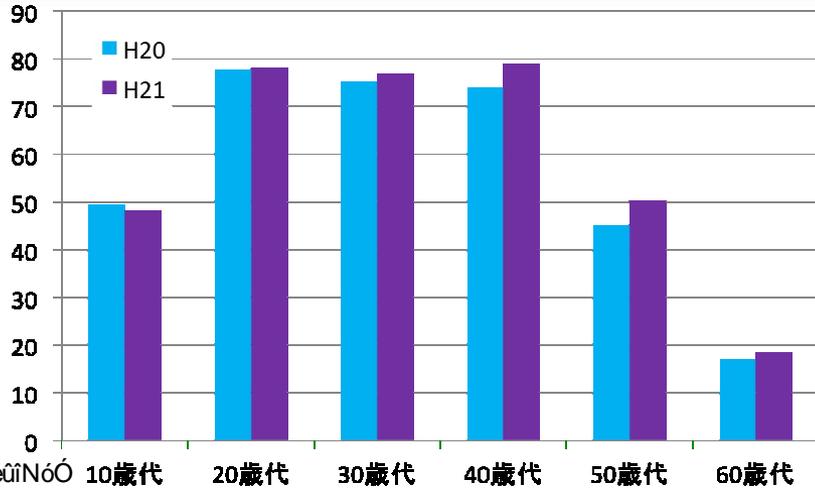
埼玉, 10歳代



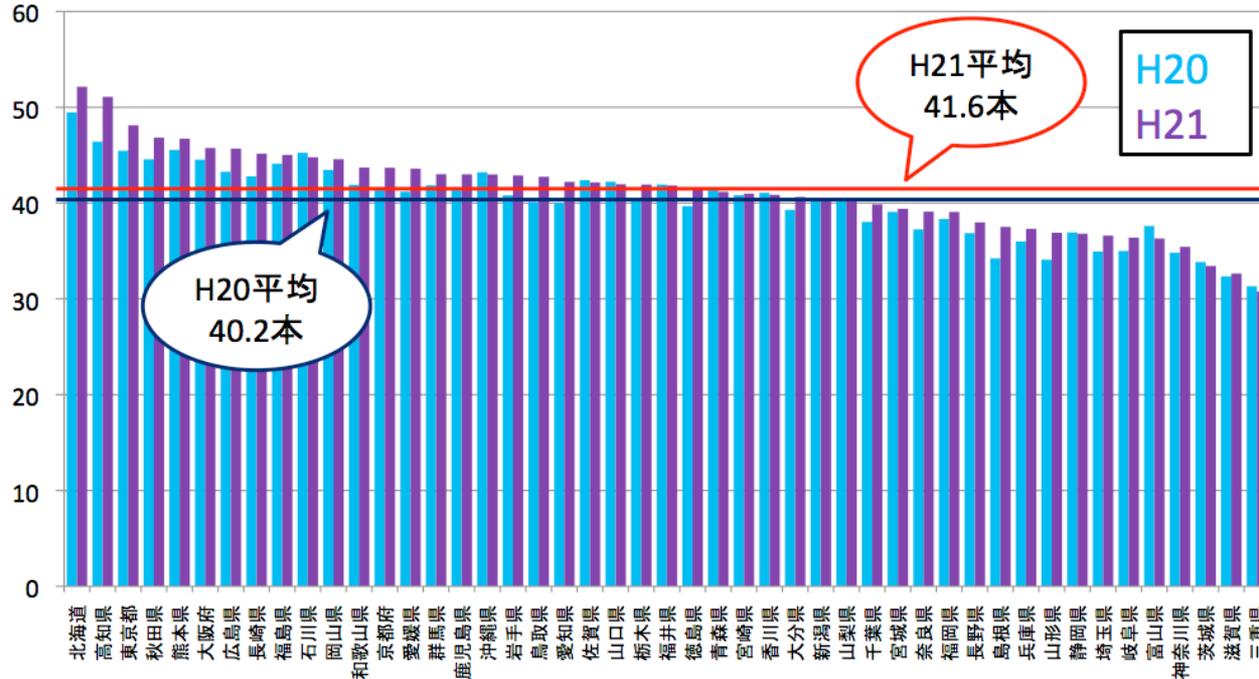
男子
女子
男女

平成22年度「献血データの解析2010」

第二部 人口1000人あたりの献血本数の解析



献血本数で見ると、20歳代はH21に減少したが、人口あたりの献血本数で見ると、増加している！
人口あたりの献血は減少していない。



献血本数		
	総本数	1000人あたり
1	東京都	北海道
2	大阪府	高知県
3	神奈川県	東京都
4	愛知県	秋田県
5	北海道	熊本県
6	埼玉県	大阪府
7	千葉県	広島県
8	兵庫県	長崎県
9	福岡県	福島県
10	静岡県	石川県

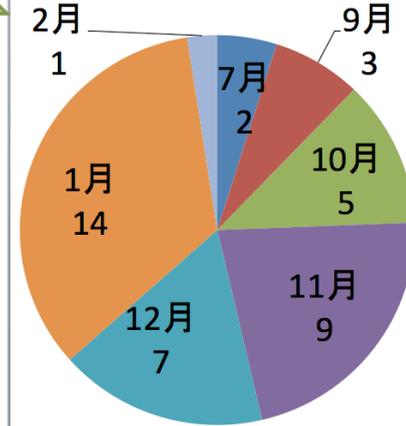
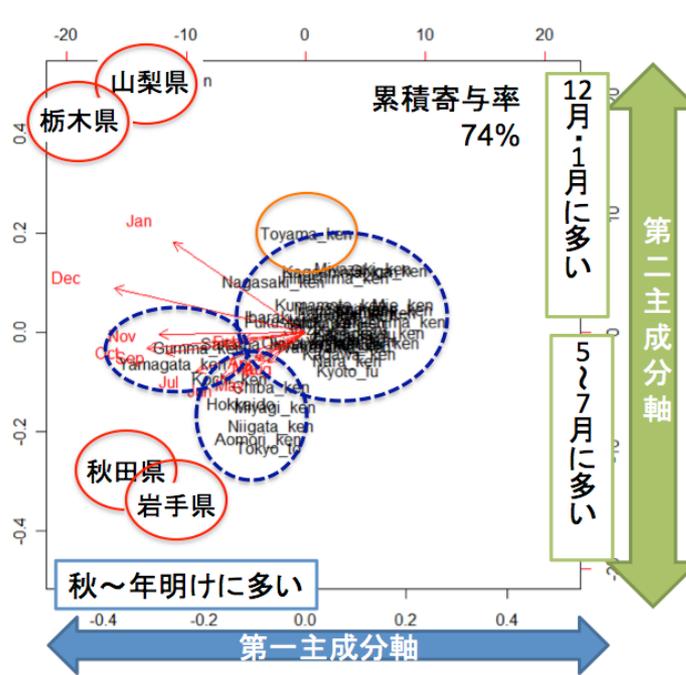
出典：平成20年人口動態統計（厚生労働省大臣官房統計情報部）
平成21年人口動態統計（厚生労働省大臣官房統計情報部）

平成22年度「献血データの解析2010」

第二部 人口1000人あたりの献血本数の解析

都道府県別・月別の献血本数の変動パターン(1,000人当り) H21年度 主成分プロット【全血献血・10歳代】

	第1主成分	第2主成分
4月	-0.13168920	-0.18297213
5月	-0.15498387	-0.31236185
6月	-0.21677926	-0.33520851
7月	-0.27927777	-0.28443242
8月	-0.09763785	-0.21896448
9月	-0.35693519	-0.15204844
10月	-0.40466041	-0.11402617
11月	-0.37323024	-0.01504715
12月	-0.48846545	0.32565782
1月	-0.33863580	0.66486735
2月	-0.16003065	-0.04731444
3月	-0.12157049	-0.20261271



山梨は、人口1000人あたりの献血本数が11-1月にかけて、全国平均を大きく上回っている

山梨県で移動献血により献血が行われた高等学校(41校)の月別学校数

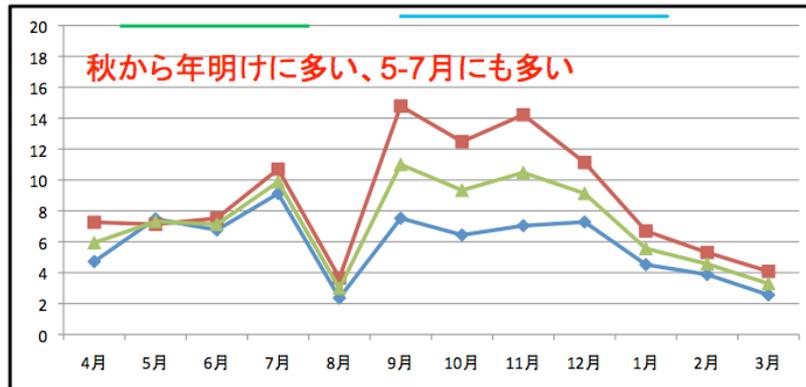
単位: 学校数

山梨県赤十字血液センター「血液事業の概況 平成20年度」を元に作成

秋田県

10歳代

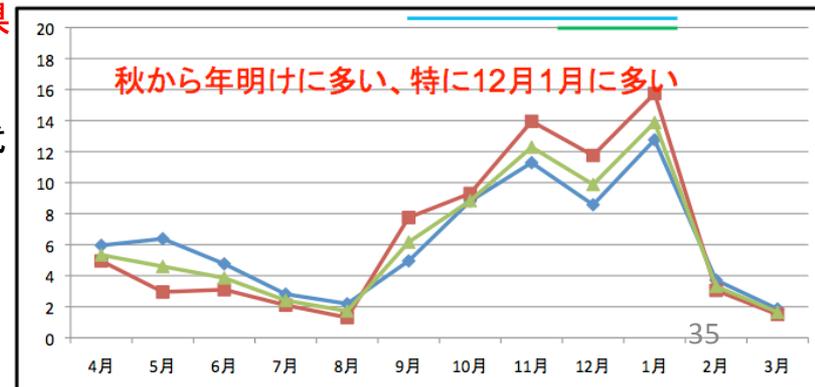
H21



山梨県

10歳代

H21



平成22年度「献血データの解析2010」

第二部 人口1000人あたりの献血本数の解析

献血本数の増加に影響を与える要因(9項目)と「人口1,000人当りの献血本数の増減」(H20対H21)との関連をロジスティック回帰分析により検討した。

項目	オッズ比	95%信頼区間		P値	
献血本数	1.00	(1.00,	1.00)	0.150	
10歳代本数	1.01	(0.95,	1.10)	0.712	
20歳代本数	1.24	(1.05,	1.53)	0.023	*
30歳代本数	1.12	(0.90,	1.42)	0.310	
40歳代本数	0.97	(0.72,	1.33)	0.849	
50歳代本数	0.93	(0.58,	1.49)	0.758	
60歳代本数	1.80	(0.98,	3.78)	0.079	
第1主成分	0.34	(0.10,	0.82)	0.034	*
第2主成分	0.54	(0.12,	2.28)	0.391	

20歳代のオッズ比は1.24 (95%CI:1.05~1.53)と1より高く推定された。これは前年の20歳代の献血本数が次年の都道府県全体の献血本数の増加に寄与していることを表わし、20歳代への献血の働きかけが重要であることを示唆している。

1. 変動パターン分析における第1主成分(=献血本数と同義の成分)
2. 変動パターン分析における第2主成分(1~3月に多いか9・10月に多いかを表わす成分)

まとめ

1. 前年比較で献血本数/人口1000人 の増減と有意に関連した項目は、20歳代の献血本数と第1主成分であった。20歳代のオッズ比は1.24(95%CI:1.05~1.53)と1より高く推定された。H20年の20歳代の献血本数がH21年の都道府県全体の献血本数の増加に寄与していることを表わし、20歳代への献血の働きかけが重要であることを示唆している。
1. 20歳代の変動パターン分析を進める予定ある。
1. 10歳代の献血本数/人口1000人 の月別変動には、学校行事と関連している(新学期、文化祭など)とも考えられ、学校との連携が必要であると考えられる。
1. 献血推進には、必要な時期と場所に必要なだけ供給することが重要であり、今後、需要量との関連性を検討する必要があると考える。

献血推進のための効果的な広報戦略等の開発のための現状分析と 対策

- 献血に関する知識、イメージが、まだ不足
 - 初めて献血の理由は、「友愛の精神」と「きっかけ」
 - 献血を継続する理由は、「友愛の精神」と「メリット」
 - 総献血本数はH21減少したが、人口1000人あたり献血本数は10歳代を除き増加した
 - 月別の献血本数の増減幅が少ない都道府県が、前年比上昇傾向
 - 前年の20歳代の1000人あたりの献血が増加すると、次年の全献血増加に寄与
 - ◎H20とH21の2年度のみ解析である。
- 月別にみた献血本数の変動、および、月別にみた人口1000人あたりの献血本数の変動は、年代別の大きな相違は認められなかった

- 献血に関する情報や意義、献血に関する正しい知識を的確に提示することが必要
 - 研修会、HopStepJumpの利用、血液製剤の知識
- 献血推進のための広報戦略は、献血経験の有無や年代、その集団特性に応じた戦略が必要
- 限られた世代をターゲットとするよりも、幅広い世代にアピールする力が強い方法が効果的(テレビやラジオ、街頭、ポスターetc)

平成23年度 「献血データの解析2011」 trial

第三部 献血回数を経時的変化の解析

【対象】

- ・2008(平成20)年度の全献血者(N=5,137,612)
- ・2009(平成21)年度の全献血者(N=5,303,431)

【解析項目】

- ・性別
- ・生年月日
- ・種類 /全血献血・成分献血
- ・初回・再来
- ・献血ルーム / 採血都道府県
- ・採血年月日 採血月・採血時年齢(16～69歳)

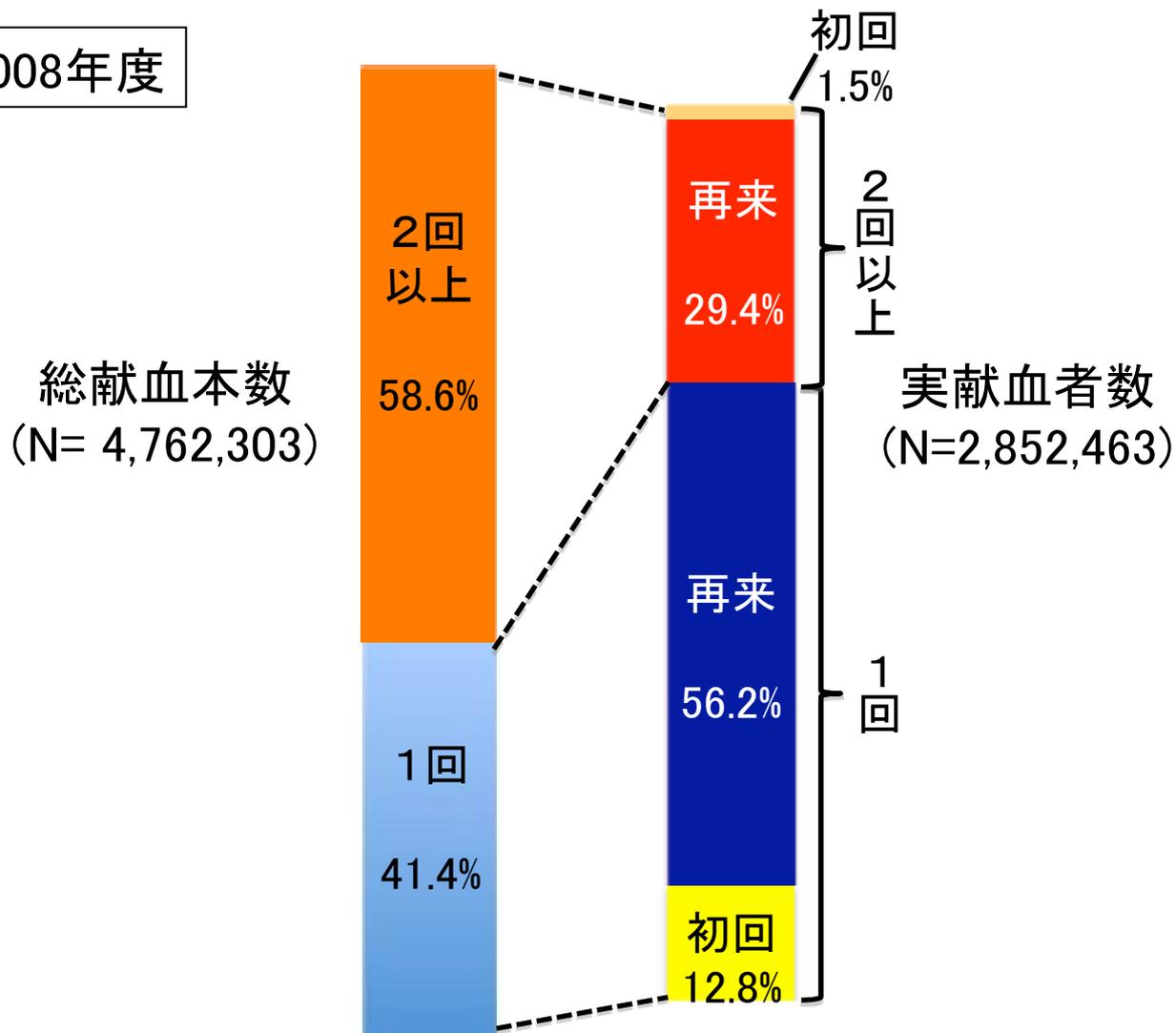
2008年度、2009年度の献血者データをIDごとに集計し、献血者ごとの年間献血回数を算出し、両年度間の経時的な変化を解析した。

平成23年度 「献血データの解析2011」 trial

第三部 献血回数を経時的変化の解析

献血者に占める再来者の割合

2008年度



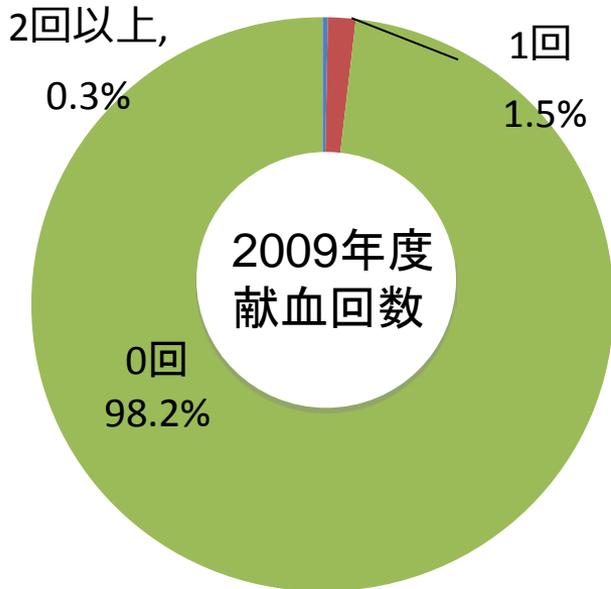
2008年度献血回数が2回以上の人は、年平均3.2回献血をした。献血再来者は全体の85%を占める。

2008年度に2回以上献血を行った献血者の割合は全体の約30%に過ぎないが、総献血本数の60%を占める。その貢献度は高いと考える。

2008年度の献血回数の違いによる 2009年度の献血回数の違い(1)

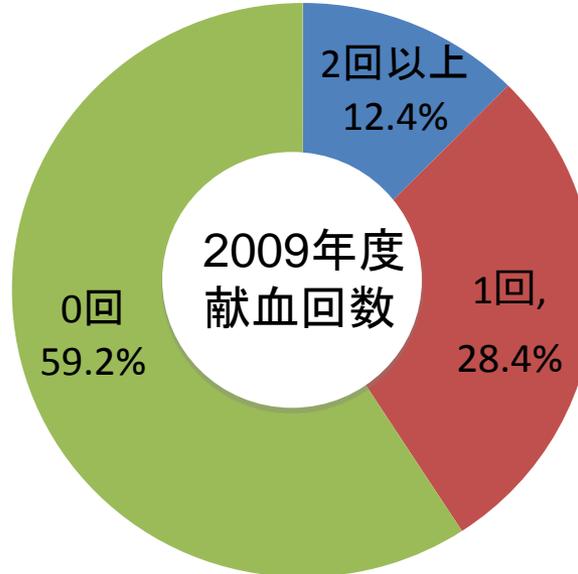
2008年度献血回数0回の人

(N=74,320,929*)



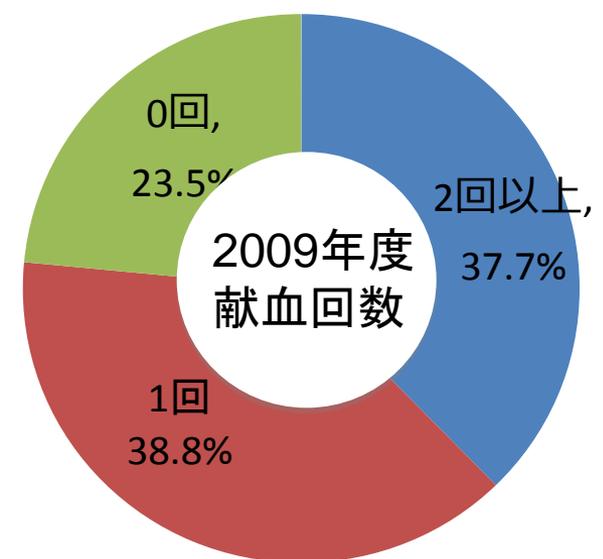
2008年度献血回数1回の人

(N=1,969,869)



2008年度献血回数2回以上の人

(N=882,595)



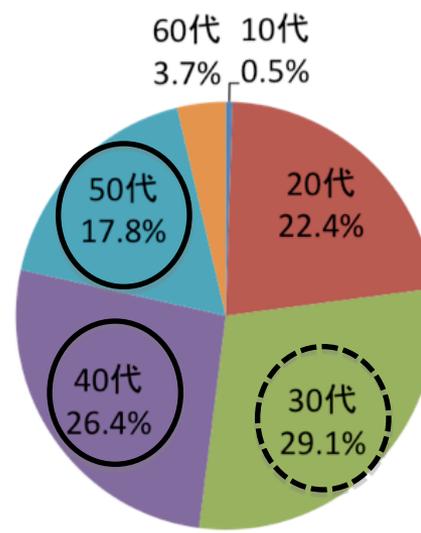
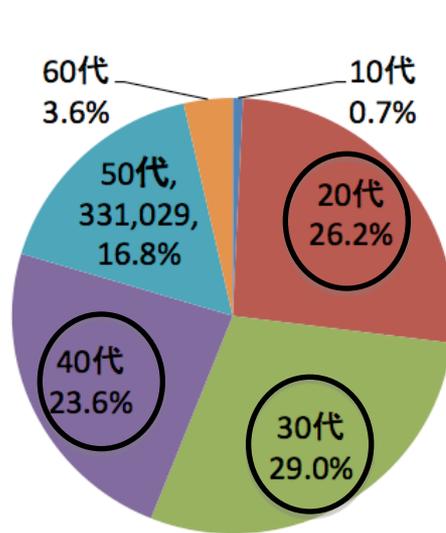
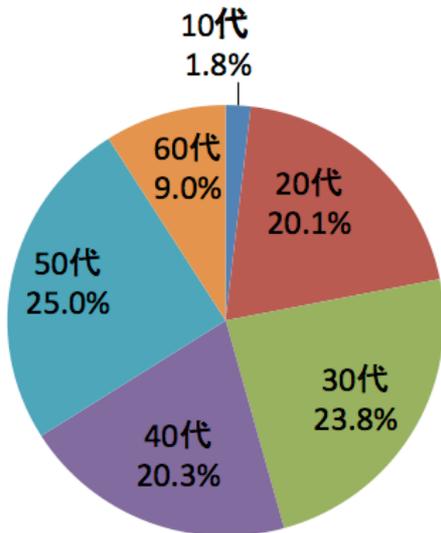
2008年度の献血回数が多いほど、2009年度の献血回数も多い

2008年度の献血回数の違いによる 集団属性の違い—年齢別、男女別

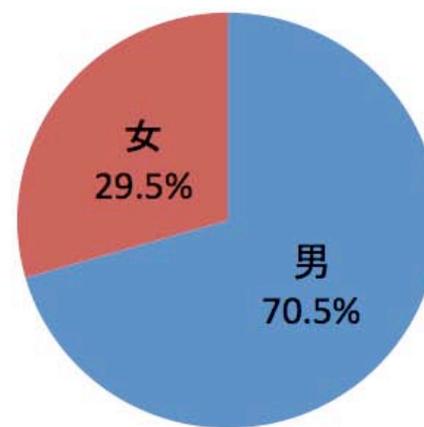
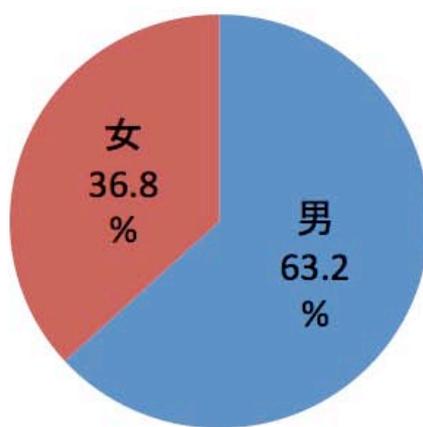
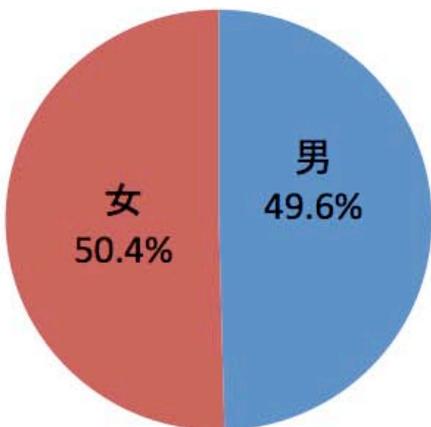
献血回数 0回
(N=74,320,929)

献血回数 1回
(N=1,969,869)

献血回数 2回以上
(N=882,594)



献血行動自体は若年層のほうが盛んだが、習慣化しているのは高齢層である。



男性のほうが献血行動が盛んで、習慣化しやすい。

2008年度の献血回数の違いによる 2009年度の献血回数の違い(3)

2008年度の献血回数別、男女別、
初回再来別、年齢別
に分類した場合の
2009年度献血回数 of 検討から.....

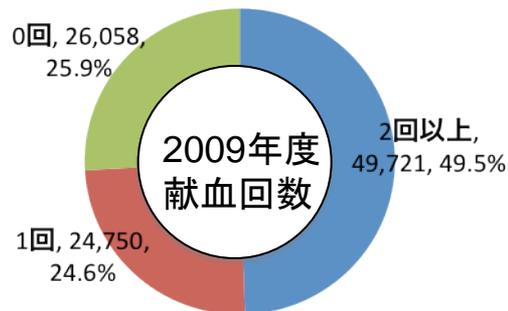
1. 2009年度の献血回数が2回以上となる割合が最も高い集団は「2008年度献血回数2回以上、男性、再来、40代」の集団で58.3%
2. 2009年度献血回数が1回以上となる割合が最も高くなるのも、「同集団」で82.9%
3. 2009年度の献血回数が0回となる割合が最も高いのは「2008年度献血回数1回、女性、初回、20代」の集団で63.5%

2008年度の献血回数の違いによる 2009年度の献血回数の違い(4)

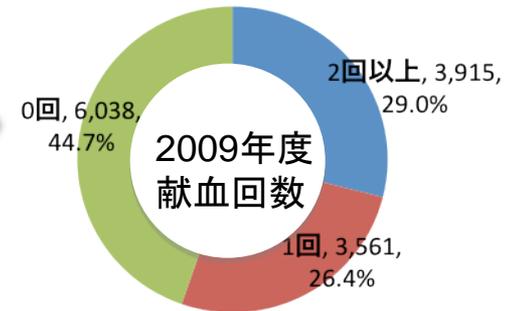
2008年度の献血回数が変化した場合の 2009年度の献血回数の変動

【仮説推定】献血回数の増加が次年度の献血回数の増加に寄与する効果

2008年度献血回数2回以上/男性/再来/20代(N=100,529)



2008年度献血回数1回/男性/再来/20代 (N=13,514)



平成23年度 「献血データの解析2011」 trial

第三部 献血回数を経時的変化の解析

trial【結果】 2008年度の献血回数の違いによる 2009年度の献血回数の違いの検討

1. 若年層では献血行動に結びつく単発的な献血は多いが、習慣化した献血者はまだ少なく、高齢層では単発的な献血は少ないが、習慣化した献血者は多いと考えられた。
2. 男性は女性よりも単発的な献血、習慣的な献血ともに多いと考えられた。
3. 献血は回数を重ねるほど習慣化すると考えられた。
4. 今年度の献血回数増加が、次年度の献血回数増加に最も効率よく寄与するのは「高齢、男性、再来」である。
5. 総献血者数の確保には献血の習慣化のみならず、献血者の新規開拓も重要である。
6. 初回献血者は初年度に少なくとも2回以上.....

1. 観察期間が2年度分のため、いくつかの課題がある
2. 長期の傾向や長期離脱者の傾向がつかみきれていない
3. 横断的な解析にとどまざるを得ない点がある

献血推進に向けた職員の研修方法に関する研究

菅原 拓男(日本赤十字社 血液事業本部)
照井 健良(日本赤十字社 血液事業本部)
福鳶 教綱(日本赤十字社 血液事業本部)
木村 美羽(日本赤十字社 血液事業本部)

平成22年度 学生ボランティアの会議

第1回 平成22年5月29日～30日 参加者16名 日本赤十字社本社
第2回 平成22年8月9日～10日 参加者85名 宮城県仙台市
第3回 平成23年3月5日～6日 参加者16名 日本赤十字社本社



平成22年度 献血受付担当職員及び接遇担当職員研修会



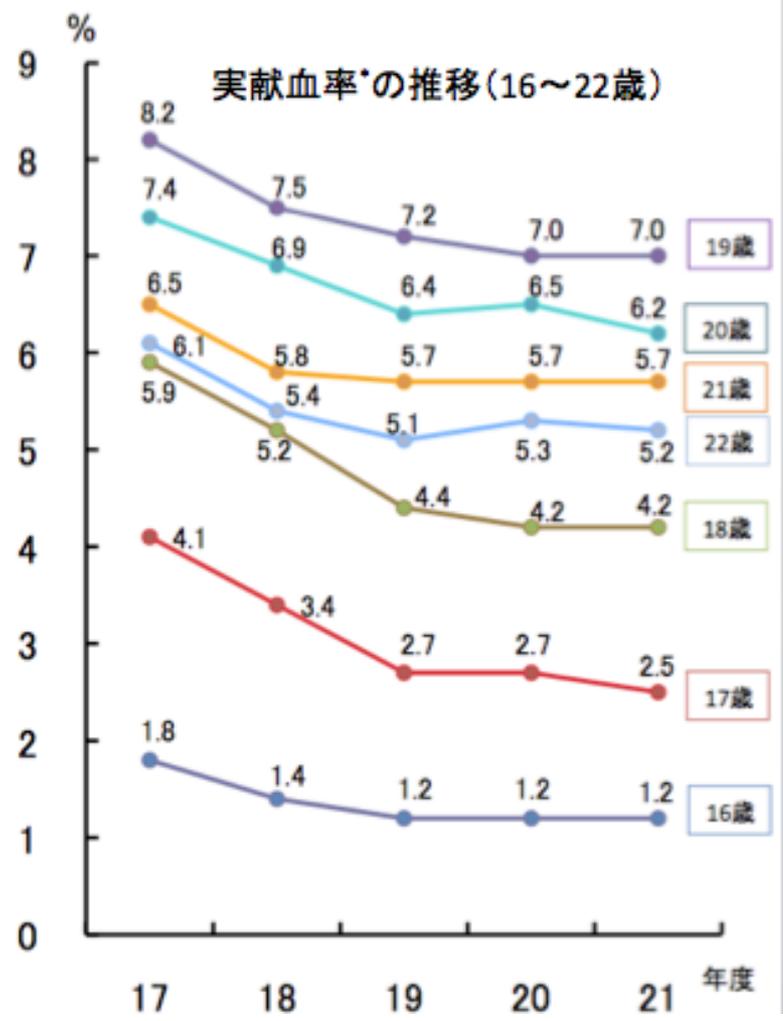
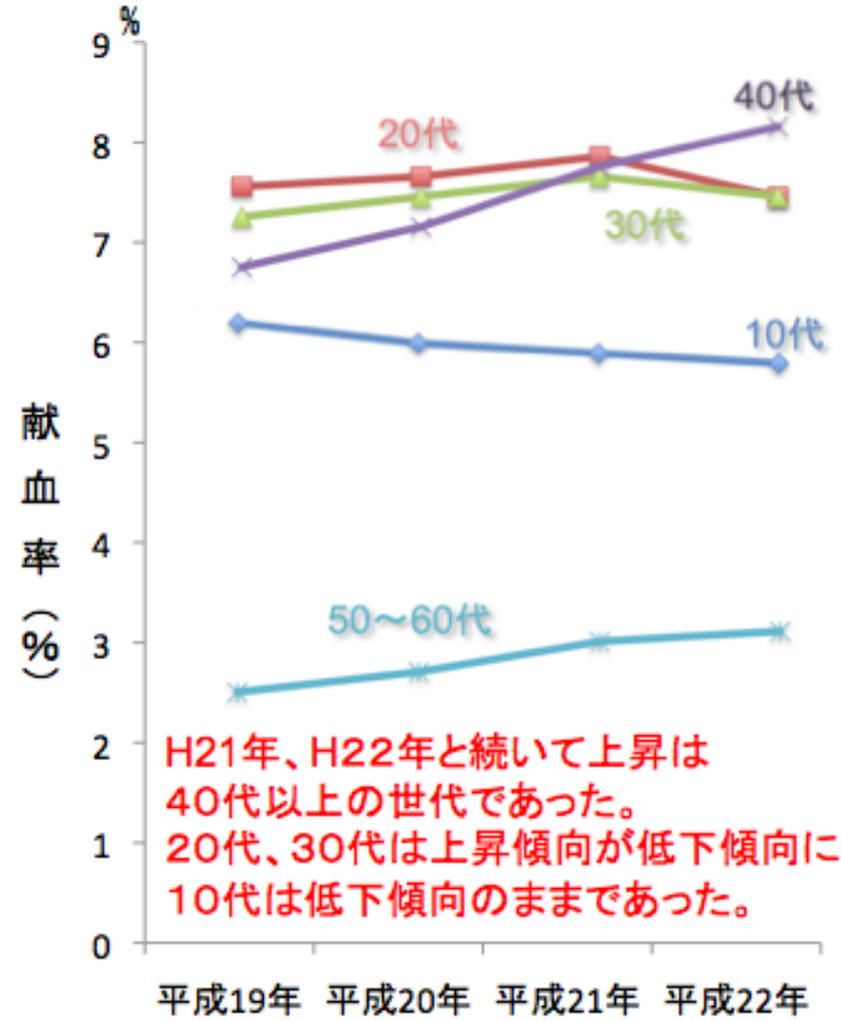
平成22年度 献血推進団体の会議

平成22年11月6日～7日 参加者120名 北海道札幌市・千歳市



今後の研究課題

年代層別人口に対する献血率(献血者数/人口)



人口は総務省統計データ(各年10月1日現在)を用いた。なお、平成22年の人口は平成21年の人口を暫定値として用いた。

*各年齢の実献血者数+各年齢の総人口(%)

まとめ

LOVE in ACTIONを始めとする新たな広報の上乗せに伴い、平成19年度以降の献血総数は増加傾向となった。
年代別の増加傾向は、40代以上が持続していたが、20代、30代は持続せず、10代は、むしろ減少傾向のままであった。

広報についての評価は中間段階であり、年代別、月別、地域別あるいは経験回数別等での献血本数等の詳細な分析が今後、必要である。

しかし、若者、特に10代、20代の献血促進に繋がる広報についての検討が、今後、さらに必要では無いかと考える。